

親密圏としての大東亜共栄圏像構築 ——プロパガンダ雑誌『新アジア』の分析から——

Vo Minh Vu

はじめに

第一次世界大戦以降、戦争は軍事だけでなく、経済、思想、宣伝といったあらゆる国家資源を動員する「総力戦」の時代となっていた。総力戦の一環として、日本は第二次世界大戦中、「大東亜共栄圏」という理念を掲げ、アジア諸国を欧米の植民地支配から「解放」し、共に繁栄する新たなアジアの秩序を構築することを目指した。この「共栄圏」は単なる軍事的・経済的な協力に留まらず、文化的・精神的な一体感、つまり「親密性」を強調していた。特に親密性の構築を目的として、日本は大規模な宣伝活動を展開した。

近年、戦時期の日本が各種メディアを用いて積極的な宣伝活動を展開していたことは、よく考察されている。難波は、国家宣伝における宣伝技術者たちの関与について考察した（難波 1998）。また、柴崎は、対外文化政策の中心となった日本文化振興会の活動の展開を詳細に論じた（柴崎 1999）。対外宣伝雑誌に関する研究は、1990年代以降、とくにメディア史や写真史の分野において盛んになっている（柴岡 2007、井上 2009、加納 2009 など）。こうした研究を通じて、日本の宣伝工作がどのように各種メディアを用いて展開されたかは、送り手である日本の立場からはかなり明らかにされてきている。しかし一方で、現地語を用いてなされた対外宣伝の内容については、いまだほとんど研究がない。

本論文は、大東亜共栄圏構想における「親密圏」形成の一環として、日本がベトナムとの親密性をどのようにして構築しようとしたかを、『新アジア』（Tân Á）雑誌を事例として考察するものである。『新アジア』は、1942年から1945年にかけて日本によってベトナムで発行されていたプロパガンダ雑誌であり、その目的はベトナムの読者に対して日本と共栄圏の正当性を訴え、文化的・経済的・政治的な連帯感を醸成することにあった。

本論文には二つの目的がある。第一に、『新アジア』の内容及び言語的表現や視覚的要素を分析することによって、親密圏としての大東亜共栄圏の構築過程を解明することである。第二に、日本がベトナムとの親密性を具体的にどのように形成しようとしたのか、その手法を分析することである。その際の枠組みとして、社会学者であるアンソニー・ギデنز（Anthony Giddens）の「親密性理論」を適用する。

アンソニー・ギデنزの親密性理論は、近代社会において個人がどのようにして「親密な関係」を築くかを説明する理論である。アンソニー・ギデنزの議論によれば、伝統的

社会においては部内者と部外者の明確な境界線が引かれており、友人関係は血盟の兄弟や戦友といった同士愛的な形態を取っており、基本的信頼が共同体や親族関係、制度化された友人関係の中に組み込まれていた（Giddens 1990）。そのため、大東亜共栄圏構想といった外部の抽象的な思想を、伝統的社会のベトナム人に浸透させることにあたっては、ベトナム人（内部者）と日本人（部外者）の境界線を崩壊させ、両者間の感情的つながり、信頼関係、連帯感を支える条件としての情緒的な「親密性」を醸成することが非常に重要となる。ここでの「親密性」がギデنزのいう「対等な人間どうしによる人格的きずなの交流」、人びとが取るべき実際の行動や取り組むべき課題を規定していく一群の特権や責任である。また、親密性が可能になるのは適切な同一性の感覚が確立した後だけであり、友情や闘争、リーダーシップ、愛などの形で表れる（Giddens 1992）。こうした親密性理論は、個人が自らに近しいと感じる対象や共同体との関係性をどう形成するかに着目するもので、メディアが読者との間に作り上げる感情的なつながりを理解する上で有用である。アンソニー・ギデنزの「親密性理論」によって、日本がベトナムをはじめ東南アジア諸国との「親しみ」や「連帯感」をどのように創り出したのかをより深く理解することができる。

1. 日本の宣伝工作と『新アジア』雑誌というメディア

日本は 1940 年代初頭、援蒋ルートを遮断するという名目のもとで、仏領インドシナに進駐した。日本にとって仏印は、大東亜戦争での南方作戦の最も重要な根拠地ないし兵站基地とされた。南方作戦に従事する部隊は仏印に一時駐屯し、仏印を経由してタイ、マレー、ビルマ、蘭領東インド、フィリピン等に送られた。仏印をこのような後方の作戦基地・兵站基地として機能させるためには地域の安定が必要不可欠であった。その安定を確保するために、日本は仏印の戦略的拠点に軍隊を駐屯させたが、軍政を敷かず 1945 年 3 月 9 日まで仏印植民地政権を温存したまま、日仏共同支配の枠組みを設けていた。その政策は、ほかの東南アジア地域に対するものとは決定的に異なる特色を有しており、必要な軍需物資を効率的に獲得し、調達するための「合理的」な方策であるとされている（白石・古田 1976）。

日本は、仏領インドシナにおいてフランスの宗主権を表面的に「尊重」しつつ、実際には独自の影響力を強める政策をとった。これは、日本が掲げる大東亜共栄圏の理念と矛盾していたが、現地の住民の支持を獲得するために、日本はその国力や軍事力、さらには共栄圏の理念を強調するプロパガンダを積極的に展開した。

しかしながら、日仏共同支配下において、フランス当局とともにインドシナを支配していたにもかかわらず、日本は自由にプロパガンダを実施する手段を有していなかった。日

本は独自の映画館を持っておらず、さらに仏印当局の管理下にあるラジオ・サイゴンを一定時間のみ利用する許可を得ていたが独自のラジオ局も有していない。また、このラジオは、華僑とフランス人を対象とするもので、広東方言、福建方言、フランス語で放送されていた（難波ちづる 2006）。そして、新聞をはじめとする出版物については、日本は日刊紙の発行を目指し、フランス当局と交渉を試みた。しかし、日本の日刊紙を発行することに強い警戒心を抱えていたフランス当局は既存のフランス語の「La Depeche」とベトナム語の「Điện Tín」（電信）の買収という日本側の提案に抵抗した。その結果、その交渉が合意に達することができなかった。そのため、日本は新聞ではなく、いくつかの雑誌を出版し、そのなかに『新アジア』という雑誌がある。

『新アジア』は日本が刊行した唯一のベトナム語雑誌であり、ベトナム人に対する宣伝を主眼とする意義からすれば、非常に重要な役割を有するものであると言っても過言ではない。『新アジア』は、1942年10月に創刊され、当初は月に2回発行されていたが、1945年の数ヶ月間は週刊誌として発行された。通常18～20ページ（表紙を含む）だが、旧正月号と特別号の場合は時に34～36ページで刊行されている。創刊号から終刊まで刊行されたのは計69冊となる。

『新アジア』はいうまでもなくプロパガンダ雑誌である。その目的について、創刊号（1942）では明記されていなかったが、第5号（1942）で『新アジア』はベトナム人を対象としており、ベトナム人に日本の文化と技術をより深く理解してもらい、「人々に東洋の文化と東洋の権利を享受することができるように指導するもの」とであるとされている。また、刊行2周年記念号である第45号（1944）の「はじめに」では、『新アジア』は「東アジアの発展を希望しており、また日本と一緒に東アジアの幸福を建設することに取り組んでいる読者向けのものである。別の言葉で言えば、この雑誌が共栄圏とともに誕生・発展するものである」と位置づけられる。

『新アジア』を刊行する機関は日本大使府の情報部であり、管理者（Gérant）は日本語の堪能な Dang Ngoc Anh という人物である。Dang Ngoc Anh は、日本の物語『竹取物語』や短編小説の翻訳も担当しており、日本文化の紹介にも積極的に関わっていた。編集部のメンバーについては資料の制限により確たることは言えないが、1945年3月9日までの編集作業は日本大使府情報班が担当したと推測できよう。1945年3月9日のクーデター以降の編集作業は、Huynh Hoan Lac という豊富な経験を有する記者が担った¹。

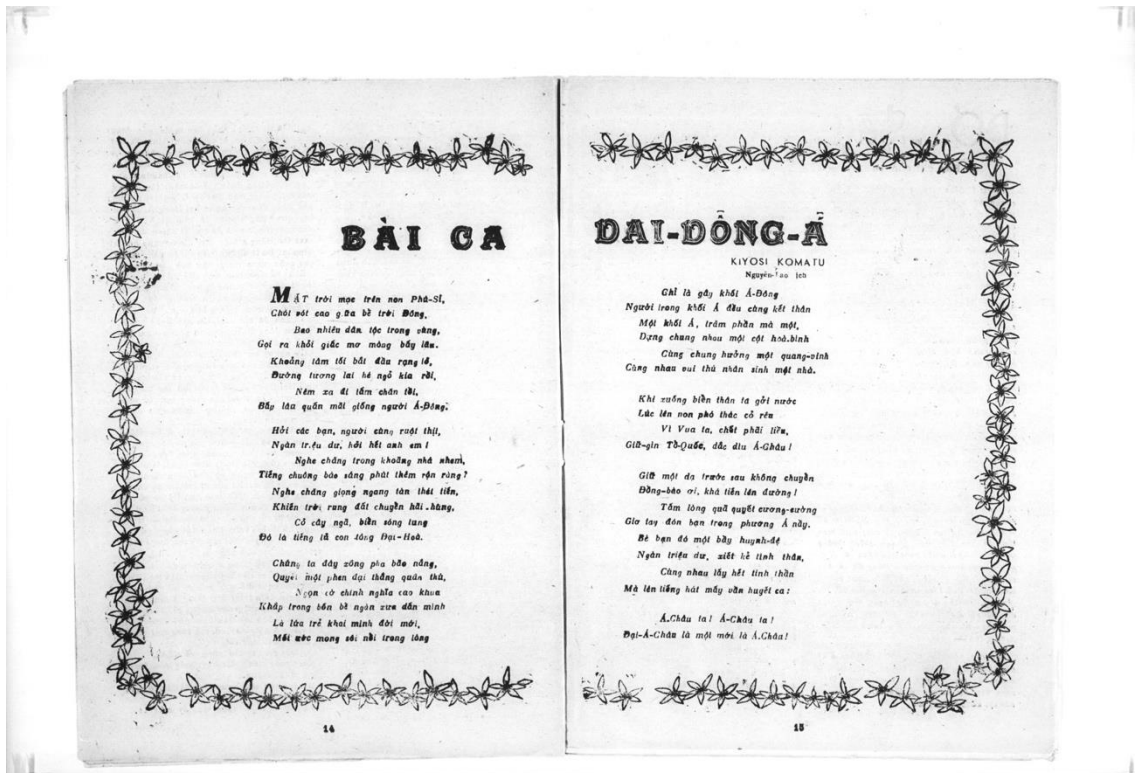
『新アジア』の記事とコラムには、しばしば著者名がない、あるいは著者名の代わりに執筆者のイニシャル（例：L.M.、N.X.Q.、X.Y.Z.など）が記されていることが多かった。他の記事には、S.木村や、S.松崎や Đặng-Ngọc-Anh といった名前が見られ、これらの人物が

¹ 『新アジア』61号（1945）。

執筆したようである。また、サイゴン駐在の領事であった内山岩太郎や、日本通信部の「情報部長」として活動していた佐藤準三、駐インドシナ大使の吉沢、そしてハノイにある日本文化会館の館長である横山など、日本の外交官たちも随筆や祝辞、読者への挨拶を寄稿していた。

さらに、有名な作家であり、インドシナに駐在していた小松清は『新アジア』に詩や論文を寄稿している。特に1943年12月8日付の第26号(大東亜戦争二周年記念号)に詩「大東亜」を、1944年の旧正月を記念して発行された第28号には「キエウ物語に見るベトナムの魂」という記事を寄稿している。

また、日本人著者は通常、フランス語で草稿を執筆し、それをベトナム人スタッフがベトナム語に翻訳していたとされている。これは、現地の読者に向けて、日本の意図をより効果的に伝えるための手法であり、現地の文化や言語に配慮したプロパガンダ戦略の一環であったと考えられる。



出所:「大東亜の歌」『新アジア』26号(1943)

『新アジア』の記事は、大きく三つの種類に分類することができる。第一種の記事は、世界や大東亜共栄圏における一般的な動向や戦況に関するものであり、これらの記事は同盟通信社によって提供されたものであった。内容としては、太平洋戦争や欧州戦線の情勢が取り上げられていた。第二種の記事は、インドシナやベトナム以外の国々の出来事や状

況を扱ったもので、日本のマレーやシンガポールにおける勝利、満州国の発展、ビルマやフィリピンの独立などが記されていた。第三種の記事は、インドシナやベトナムに直接関わる出来事や現地の状況を報じたもので、特にベトナムの政治的・社会的動向に焦点を当てていた。

『新アジア』雑誌は、全国的に刊行されることを目指していたものの、読者のコラムの内容から判断すると、主な読者層はベトナム南部に集中していたことが分かる。また、当時のベトナムでは識字率がわずか10%程度であったことから、読者数は決して多くなかったと推測される。しかし、Nguyen Ky Namという当時活躍していた記者の回想録によれば、ベトナムの知識人層は『新アジア』を熱心に読み込んでいたことが明らかにされている（Nguyen Ky Nam 1964: 119）。このことから、限られた層であっても、知識層を中心に『新アジア』が一定の影響を持っていたことがうかがえる。

2. 「親密圏」と文化的な絆

「大東亜共栄圏」という言葉が公式に初めて登場したのは、1940年8月1日の、第2次近衛内閣の外務大臣であった松岡洋右の発言であるが、この「大東亜共栄圏」構想の出発点は、1940年7月26日に第2次近衛文麿内閣が閣議決定した「基本国策要綱」の中の「大東亜新秩序建設」構想にあったと考えられる（山本 2011: 70-71）。この「基本国策要綱」では、アジアを欧米の植民地支配から解放することと、大東亜新秩序の建設という二つの戦争目的が掲げられていた。大東亜新秩序の基本方針は、「皇国ノ国是ハ八紘ヲ一宇トスル肇国ノ大精神ニ基キ世界平和ノ確立ヲ招来スルコトヲ以テ根本トシ先ツ皇国ヲ核心トシ日満支ノ強固ナル結合ヲ根幹トスル大東亜ノ新秩序ヲ建設スルニ在リ」とされていた（外務省編 1965: 436）。

さらに、1941年1月の第76回帝国議会での答弁準備のために外務省が作成した文書において、大東亜共栄圏は「南洋ヲ含ム大東亜ノ諸国、諸民族ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ相互ニ侵略、搾取、圧政無キ共栄圏」と説明されていた。アジア・太平洋戦争が始まると、この「大義名分」はさまざまな宣伝媒体で「大東亜戦争」の「聖戦性」を担保するスローガンとして大々的に打ち出された。

このような背景のもと、アジアの解放と新秩序の建設というテーマが、1942年10月に創刊された『新アジア』の基調となった。創刊号では、戦争の「聖戦性」が強調され、「現在の太平洋における戦いが大東亜における新秩序建設を目的とする聖戦であるため、この空の下にいる全ての民族が英米の鉄手（支配）からの解放という最高の目的を達成させるように、あらゆる分野で日本と協力するという責任を共有しなければならない」と述べられ

ている。

1944年6月4日発行の第36号に掲載された「大東亜宣言の意義」という論考では、大東亜宣言が大東亜共栄圏の「憲法」のように位置付けられ、東アジア新秩序の意義についても解釈が加えられた。この論考は、大東亜共栄圏における秩序の基盤を、アジアの伝統的な「道義」や「人倫」に根ざしたものであるとする思想を示している。特に、英米の個人主義や自己利益を追求し、共同体や民族の精神を欠いている社会を批判し、それに対抗する形で東アジアの共同体精神や家族主義を強調している。さらに、「東アジアの秩序」は、東アジア固有の「道義」を基盤としたものでなければならないとされる。東アジアの「道」は、人倫や正義に基づくものであり、これは単なる法律（法治）ではなく、「人間が人間を統治する」ための道理に従うべきものであるとされている。これは、東アジアにおける「人倫の道」が統治の基盤として長く存在してきたことを反映している。この思想の中核にあるのは家族主義の概念である。親子や兄弟の紐帯が家族の基盤となり、さらに家族の紐帯が国の基盤となるという連続性が強調されている。国が存在しないと家族も個人も意味を持たないという考え方は、国民全体が家族のような感情で統治されるべきだという大東亜共栄圏の理念と結びつけられている。このような秩序は、各国が自分の「道」を守りながら協力し合うことで平等が成り立つとされており、これは家族における役割分担と協力の関係に似ている。最後に、日本がこの大家族における「首頭」としての役割を担っており、神聖な責任を負って「聖戦」を遂行しているとされている。日本は他のアジア諸国にとって手本となる存在であり、他国は日本の行動に倣い、「道」に沿って協力するべきであるとされている。ここで相互扶助や家族の精神が大東亜共栄圏の統治原則として強調された。

実際に1942年5月の『新アジア』9号に掲載された松崎雅夫²のエッセイには、次のように日本と東南アジア諸国を同文同種の兄弟とした記述がある。

日本が英米に宣戦布告したのは、彼らが東亜全体を支配しようとする野心を持ち、また日本がこの地域の諸民族のためにその繁栄を築こうとしていたからだ。この戦争は、東亜における同じ血統、同じ肌の色、同じ風習を共有する諸民族の解放戦争と見なされています。この地域のすべての民族が一つの家族の兄弟姉妹のように団結し、協力すべきです。その中で、日本は兄として、敵を打ち破るためにさらに努力しなければなりません（中略）各民族は皆、共栄圏の建設に努めており、このことをしっかりと心に留めていただきたいと心からお願い申し上げます。かつて東亜の諸民族は、英米の勢力によって分裂していましたが、今日では一つの大きな家族として団結しています。その家族とは、すなわち大東亜共栄圏です。私たちは手を取り合い、大東亜

² 生年および出身不明。当時、ベトナムで新聞、文化紹介などの宣伝に深く関与していた。

の同胞として兄弟となっています。この美しく温かい家族を永遠に守り抜かなければなりません。

つまり、「家族」としての大東亜共栄圏では、日本とベトナム、さらには他のアジア諸国が「兄弟」として共通の目標を持ち、欧米列強に対抗するという連帯感が強調されている。

「兄弟姉妹」という言葉は、家族の一員として対等な関係にありながら、それぞれの役割を果たすべき存在であることを示す一方で、日本が「兄」として他の国々を導く立場にあることも暗示している。

『新アジア』の13号（1943）では、家族は、「人類社会において最も重要な要素です。社会は多くの国家に分かれ、国家は多くの家族に分かれます。国家には王や君主があり、家族には家長がいます。家長は家族の長であり、家族の重責を担います。家長は通常、私たちの父親です。多くの家族が集まって国を成します（中略）家族の中での役割は非常に多いです。家族の一人ひとりが常に自分の役割について考えなければなりません。家族の中での役割をしっかりと果たすことができる人こそ、良い人と言えるのです」とある。19号（1943）のビルマの独立支援についての記事では、日本はビルマの「解放者」かつ「保護者」として描かれ、欧米列強からの独立を支援する「大兄」としての役割が強調された。日本はビルマを大東亜共栄圏という「家族」の一員として迎え入れ、共栄を目指すための連帯感を打ち出し、軍事的支援にとどまらず、ビルマの発展や繁栄を導く存在として描かれた。このように、大東亜共栄圏の「大家族」的な描写の中で、日本は他のアジア諸国の「保護者」や「導き手」としての立場が強調されている。これは、家族における「兄が弟を守る」または「親が子を導く」といった構図を反映しており、日本が軍事的・経済的・文化的に他国を保護し導く役割を担っていることを強調するものであった。

そして、『新アジア』の記事やイラストでは、アジア諸国の代表者たちが手を取り合い、共に前進する姿が描かれており、その中心には常に日本が位置していた。このようなビジュアルは、日本を中心にアジア諸国がひとつの「大家族」として団結し、共に未来を切り開くというイメージを伝えるものであり、共栄圏内における日本のリーダーシップを正当化する役割を果たしていた。

大家族としての大東亜共栄圏の描写は、戦争への動員を正当化するためにも利用された。家族が共に困難を乗り越えるように、アジア諸国も共に欧米列強に立ち向かうべきだという連帯感が強調され、戦争は「家族を守るための戦い」として描かれた。『新アジア』では、日本の兵士が他のアジア諸国の兵士と共に戦場で協力し合う姿が美化され、この連帯感が戦争を正当化するための重要な要素として用いられた。



出所：16号表紙（1943）



出所：7号表紙（1943）



出所：26号表紙（1944）



出所：29号表紙（1944）

欧米列強による「侵略」からアジアを守るために、日本が「家族」のリーダーシップを発揮しているというメッセージが強調された。ベトナムにおいて、難波ちづる（2006）が明らかにしたように、ベトナムにおける日本のプロパガンダのなかでフランスを正面きって糾弾することはできない、一方、当時フランス側のプロパガンダにおいても反日表現が排除された。その結果、『新アジア』での大東亜共栄圏の共通の「敵」は、英米と重慶国民政府に限定され、アメリカとイギリスが「残忍さ」・「残酷さ」・「非人道的」という言葉で表現され、また「植民地支配下において我々同胞の血を吸う吸血鬼」のように「搾取者」とであるとされている。そうした「敵」と対比しながら、日本は、崇高な使命を帯びた戦闘能力の高い軍隊であることが、美しく表現されている。さらに戦争ニュースで日本軍が規律ある知的な軍隊であることが訴えられ、日本陸軍の各部隊の戦闘能力の充実振りや空に陸に進撃していくさまが力強く表現された。そして、日本軍が崇高な使命を帯びた戦闘能力の高い軍隊であることを、あくまでも美しくスマートに表現している。加藤建生、山本五十六などの人物に焦点を当て、日本軍が激烈な戦場でアジア解放という神聖な使命を掲げながら勇敢に戦闘するヒーローとして表象されている。戦車や戦艦、軍人の姿が描かれた表紙は、日本の強さを視覚的に訴えるものであり、ベトナムの読者に対して日本の圧倒的な力を印象付けた。これにより、読者は日本がアジアのリーダーとしてふさわしい存在であると感じるように誘導された。

このように「大家族」としての大東亜共栄圏の描写は、日本が他のアジア諸国との親密な連携を強調し、自らをその「家長」として位置付けるためのプロパガンダの一環として機能していた。この描写は、文化的な共通点やアジア的価値観の強調、さらには戦争への動員の正当化を通じて、アジア諸国が一体となって共に欧米列強に対抗し、繁栄するべきだというメッセージを伝えるものであった。

実際には、「家族」という象徴は新しいものではない。この象徴は高村光太郎の「危急の日」という詩においても見られる。その詩では、高村は、われ（日本）は義（道理）と生命とに立ち、義を護るため、侵略者（英米）に抵抗し、東亜の大家族（大東亜共栄圏）を作ろうとする、と訴えた³。また、それぞれの構成員の責任は、日本人の労働秩序・身分秩序の観念に由来する「分」の論理に由来すると考えられる。それによって、大東亜共栄圏内の各民族や国家が自分の「分」に応じて忠実に役割を果たし、日本という指導国家に奉仕することによって「独立」も保障されるというのである。

この象徴は、1910年代に提唱された「東洋盟主論」あるいは「日本盟主論」といった主張に由来した「盟主」志向主義と儒教的な家父長制度を反映するものであると考えられる。大東亜建設審議会の基本答申（「大東亜建設に関する基礎要件」1942年5月）に現れているように、共栄圏像は指導国なる日本が圏内諸国を「内面指導」し、政治・経済・文化の秩序を統制し、圏外諸国との交易も指導国の統制の下におかれるという姿であった（石川1982:1257-1262）。しかし、波多野によれば、こうした家父長的な階層秩序の構想は、重光葵外相時代（1943年4月～1945年4月）に批判され、自主独立と平等互惠を基調とした新同盟条約の締結、独立許与からなる新たな秩序原理（重光の構想）に取って代わられた（波多野1996）。

「大東亜宣言」が発表されたのは1943年10月のことであるが、なぜ「盟主」志向主義及び儒教的な家父長制度という観点による「大東亜戦宣言」の解釈がプロパガンダ用の媒体としての『新アジア』に掲載されたか。おそらく、現実化された新たな秩序原理は、仏印の状況に適応出来なかったからであろう。ピーター・ドウスが指摘したように戦間期の帝国主義にとって「民族自決主義」がもはや避けることのできない国際的潮流となっていた（ドウス1992）。大東亜共栄圏を建設するにあたって、圏内諸民族の独立の要望を尊重しなければならない。実際には、日本はビルマ、フィリピンに「独立」を付与した。

「現実化」された事例として、満州、中国国民政府、ビルマ、フィリピンは『新アジア』で頻繁に取り上げられた題材の一つである。しかし、ベトナムの場合は、1945年3月9日の仏印処理（明号作戦）まで日本はベトナムの独立に関する正式な展望を明示したことがない。『新アジア』の1943年旧正月号では「タイはタイ人のために、ビルマはビルマ人の

³読売新聞夕刊、昭和16年12月8日。

ために、フィリピンはフィリピン人のために... この文を完成するのは、あなた方ベトナム人読者です」という曖昧な文でしめくくられたことによって、遠回しにベトナムへの独立支持を暗示している。

仏印進駐後、日本はフランスの植民地政権を温存し、ドイツの同盟者であるヴィシー政権に仏印におけるフランスの宗主権を「尊重」することを約束した上で、ベトナムの独立というテーマをプロパガンダにおいて扱うかは日本にとって重要かつ微妙な問題であった。こうした大東亜共栄圏の構想とは明らかに矛盾する立場にある日本にとって、「大家族」として大東亜共栄圏を象徴することは、おそらく合理的な選択であろう。

3. ベトナム人との「親密性」の形成

日本は、大東亜共栄圏思想およびその思想を主張する日本に対するベトナム人の支持を獲得するために、ベトナム人との信頼関係を築くことが重要であると認識していた。この信頼関係を構築するためには、両国間の文化的、歴史的な共通点を強調し、価値観を共有することが重要とされた。

インドネシアにおいては、第16軍が1942年3月7日に公布された「軍政布告第1号」で、日本とインドネシアが同族同祖であり、大東亜共同防衛と現地住民の福祉向上と共存共栄を図ることが示された。しかしながら、インドネシアとは異なり、日本とベトナムの間には「同族同祖」の関係は存在せず、そのため、ベトナムとの親密性を築くためには、他の手段が必要であった。その結果、『新アジア』では、両国の文化的共通点や歴史的な絆が強調され、ベトナム人に対して「同じアジアの一員」としてのアイデンティティを植え付けることが狙われた。

『新アジア』では、頻繁に日本とベトナムの間に共通する伝統的価値観が取り上げられた。特に両国が重んじる「家族」や、長幼の序、また、儒教的な「忠」と「孝」といった伝統的価値観が、共通の文化的基盤として強調された。これらの価値観をもとに日本がベトナムを指導し、その発展を支える役割を担っているという主張がなされている。日本は、こうした文化的価値観を利用して、ベトナムに対して指導者としての正当性を訴え、アジア全体の結束を強調していたのである。

これらの文化的側面を通じて、アジア諸国は、欧米列強の植民地主義に対抗しながら、アジア独自の文化や伝統を尊重する必要があると訴えられていた。日本は、このようなプロパガンダを通じて、自らをアジア諸国の「保護者」および「指導者」として位置付け、アジアの連携を強化しようとしていた。

なお、『新アジア』でしばしば扱われたテーマとしては、日本とベトナムの文化の共通性

を紹介することである。『新アジア』の5号では、両国の伝統的な行事や音楽の類似性が紹介されたうえで、「日本人とベトナム人は精神的に非常に近い」と結論づけられた。また、66号(1945)に掲載された、筆談によって日本人と意思疎通を果たすことができたファン・ボー・チャウについてのエピソードを通じて、両者とも漢字文化圏にあることが強調された。

『新アジア』の1943年旧正月7号の記事では、日本の正月行事を紹介し、日本の伝統的習慣と日本人の資質を賞賛し、日本人は「自分自身の個人的利益のことしか考えない国民とは異なり、祖国と天皇の末永い繁栄のために祈ることができる」と自賛している。そして、ベトナム人に「我々は日本人のように愛国的になる理由を見つけられない。なぜなら、国家という点において、我々の状況は日本とは全く異なるから」と語らせている。つまり、ベトナムはフランスの植民地であり、独立した国ではないことを暗示している。



出所:「多くの日本ことわざがベトナムのとそっくり」『新アジア』27号(1943)

『新アジア』で両国の文化的共通性を強調するために取り上げられたもう一つの事例として、24号(1943年11月5日)から第50号まで連載された「同じ意味のことわざ」というコラムがある。このコラムでは、毎回2~3つの日本とベトナムのことわざが紹介され、その類似性が強調されていた。たとえば、「父の縁は山よりも高く、母の恩は海よりも深し」や「うちほどいいところはない」、「良薬口に苦し」、「元日の朝は室内を掃かぬもの」、「痘痕も靨」といったことわざが取り上げられた。ことわざは、国や社会、民族の文化を反映するものであるため、これらの類似することわざを通じて、両国が文化的な紐帯を共有しているという印象を与えることができたと考えられる。

このような文化的類似点の強調は、当時の日本人研究者の言語学・民俗学的な研究成果と結びついていると考えられる。民俗学者として、当時仏印に派遣され、極東学院で勤務していた松本信広は、東南アジア諸民族が南洋諸島に移住した際の文化伝播論を唱え、東南アジアの文化と古代日本の文化に類似点があることを指摘していた。松本は、日本神話

に南方からの影響が見られると示唆し、東南アジアと日本の類似点を、東南アジア諸民族がかつて日本に移住したことと関連付けて説明した。彼は「印度支那民族はかつては遙か北方に居住し、中国民族とも密接な関係があり、その文化の影響は海岸伝いに朝鮮や日本にも及んでいたことが考えられる」と述べている（Karlova 2012）。

また、『新アジア』では、日本とベトナムの歴史的な交流の例として、林邑音楽、徳川将軍からグエン王への書簡、ホイアン日本の日本町などが紹介されている。これらの歴史的なエピソードは、両国が古くから深い関係を持っていたというイメージを強調し、共栄圏の一員としてのベトナムと日本の絆を強調するための手段となった。



出所：「日越国交」『新アジア』20号（1943）



出所：「ベトナムにあるかつての日本町」『新アジア』23号

たとえば、『新アジア』の17号（1943年）では、「林邑音楽」の日本への伝播についての記事が掲載された。この記事では、ベトナム中部の古代国家「林邑」から伝わった音楽が、日本の宮廷音楽として受け入れられ、雅楽の一部として日本で非常に重んじられたことが紹介されている。林邑音楽は日本の文化に深い影響を与え、両国の文化的な交流の歴史を象徴するものとして位置づけられていた。次に、20号（1943年）では、江戸時代にお

ける徳川幕府とベトナムの阮朝（グエン朝）との外交関係についての記事が掲載された。徳川幕府は、ホイアンを通じてベトナムとの交易を進めており、徳川将軍は阮朝の君主に対して友好的な書簡を送った。この書簡は、両国の商業的および外交的な関係を築くうえで重要な役割を果たし、相互の尊敬と協力を象徴するものであったとされている。さらに、23号（1943年）では、ベトナム中部の港町ホイアンにある日本町と日本橋（来遠橋）が紹介された。ホイアンは17世紀に日本の商人が頻繁に訪れ、日本人居住区が形成された町であり、当時の日本とベトナムの経済的な交流の中心地であった。日本町と日本橋は、両国の長い交流史を象徴する遺産であり、両国の文化的・商業的つながりを示す重要な証拠であるとされている。



出所：「チャム音楽が日本に伝わった」『新アジア』17号（1943）

これらの事例を通じて『新アジア』は、日本とベトナムの長い歴史的な絆を強調し、両国の友好関係を強化するための手段として活用されていた。これにより、共栄圏の一員としてベトナムと日本の結びつきを強調し、両国の関係をさらに親密なものにすることを目指していた。

『新アジア』を通じて、日本はベトナムのフランスによる植民地支配からの独立を目指す姿勢と、日本が欧米列強に対抗してアジアを「解放」するという使命を結び付けていた。特に、ベトナムの独立運動家や民族的英雄を称賛する記事を通じて、歴史的な共通点を強調し、ベトナムとの連帯感を築こうとしていた。例えば、第66号（1945）では、ベトナムの独立運動家であるファン・ボイ・チャウと、日本の政治家犬飼毅、そしてファン・ボイ・チャウを支援した浅羽佐喜太郎との交流についてのエピソードが掲載された。1918年に、ファン・ボイ・チャウが再び日本を訪れ、浅羽佐喜太郎に会おうとした際、浅羽の死を知

ることになった。ファン・ボイ・チャウはその恩義に報いるため、浅羽を称えるための記念碑を建立した。このエピソードは、日本とベトナムの歴史的な友好関係や、両国の情緒的な結びつきを強調するもので、ベトナム人との親密な関係を築こうとする試みが見受けられる。

これらの例からも分かるように、『新アジア』は、日本がベトナムを含むアジア諸国との文化的、歴史的な絆を強調し、それを欧米列強に対抗するための正当性として活用するプロパガンダの手段として機能していた。

なお『新アジア』の第26号には、小松清⁴がベトナムの国民的長編詩『金雲翹』（キン・ヴァン・キョウ）についての論考を寄せ、同作を「安南文学の最高峰」として高く評価した。小松はこの作品をフランス語から日本語へと翻訳し、その中で東亜共栄圏における文化的遺産としての性格付けが必要であると述べた。このように、ベトナムの伝統文化に敬意を表しながらも、共栄圏の枠組みの中で日本がリーダーシップを発揮しているという構図が描かれていた。

さらに、『新アジア』では、ベトナムの伝統的な詩体である「六八体」や「双七六八体」を用いた大東亜共栄圏に関する宣伝も行われた。これらの詩体はベトナム語独自の短詩形式であり、漢詩の形式をベースにしつつ、ベトナムの文化や歌謡に深く根ざしている。このような形式を用いることで、日本はベトナムの文化を尊重しているという印象を強化し、共栄圏の一員としての連帯感を高めようとした。

また、『新アジア』では、日本語教育や日本文化の紹介を通じて、ベトナム人との文化的な親密性を深める試みがなされた。日本語の基本フレーズや会話を教える連載が定期的に掲載され、日本語を「大東亜共栄圏」の共通語として位置付けた。ここからは、ベトナム人が日本文化に親しみを持ち、日本をリーダーとするアジアの一員であるという意識を促進する意図が明確に現れている。そして、伝統的な日本文化や芸術、例えば茶道や着物、日本の歴史的英雄に関する物語が『新アジア』で紹介されることで、ベトナム人読者に対して日本文化への親近感を育む努力がなされていた。これらの文化的要素は、アジア諸国が共有する「アジア的価値観」の象徴として強調され、欧米文化との差別化を図っていた。特に日本映画も頻繁に紹介され、愛国的な作品や日本の家族観を描いた作品が上映された。たとえば、小津安二郎監督の映画『父ありき』などが上映され、日本の伝統的な家族観や価値観がベトナム人に届けられた。このように、日本の文化を通じて親密さを感じさせ、ベトナムの人々が日本との共感を深めることが目指されたのである。

⁴小松清（1900～1962）、フランス文学者。1941年5～7月改造社特派員として、1943年4月～敗戦まで仏印に滞在した。在東京越南復国同盟のリーダーであるクオンデ侯と接触。フランス語からヴェトナムの古典『金雲翹』を訳した。

おわりに

『新アジア』に表象された「大東亜共栄圏」像についての考察を通じて、次の2点が明らかになった。

第1に、『新アジア』を通じた日本のプロパガンダは、大東亜共栄圏を「大家族」として描き、日本を「長兄」として他のアジア諸国を導く存在として正当化するものであった。文化的・歴史的な共通点を強調することで、日本はベトナムとの親密性を強化しようとしたが、その効果は限定的であった。それでも『新アジア』は、戦時中の日本のプロパガンダ戦略を理解する上で重要な資料となっており、東南アジアにおける日本の影響力を象徴している。

『新アジア』を通じて、日本は「内側」と「外側」（ベトナム人と日本人）の境界をぼかし、文化的・歴史的要素、価値観の共有を通じて共通点を作り出そうとした。家族が感情を基盤とした団体の一種であるとすれば大東亜共栄圏は、英米という共通の「敵」に対する闘争の感情、自主独立志向の感情、そして独立後の共存共栄に対する感情を基盤として成り立っていた。また、この「独立」と「共存共栄」を達成するために、「大家族」の構成メンバーは、感情や信頼に基づく関係のもと、それぞれの責任を負い、互いに犠牲を払うべきだとされた。このようにして、日本は、ベトナムをはじめ「大東亜共栄圏」に加盟する諸国を「兄弟国」として描きつつ、欧米列強からアジア諸国を守る役割を果たしていると主張し、日本のリーダーシップを正当化した。この「大家族」的象徴は、大東亜共栄圏における親密さの形成に寄与し、ギデنزが述べる「対称的な相互作用」（reciprocity）を果たすと期待された。

第2に、『新アジア』は、発行当初からベトナム人向けの宣伝に大きな重点を置いていたと考えられる。雑誌のタイトルが示す通り、内容は日本や大東亜共栄圏に関するものが中心であったが、ベトナム人の共感を得るために、共通の文化的類似点や価値観、過去の友好関係に基づくエピソード、文化的交流を通じて親密な関係を築こうとしていた。

当時のベトナムでは、フランス当局が「労働・家族・祖国」を理念とするヴィシー主義に基づき、家族を基礎とした社会的ヒエラルキーや伝統的価値観を重視していた。そのため、日本が「家族」という象徴を用いて大東亜共栄圏を宣伝したことは、フランスの宣伝に対抗する意図もあったと考えられる。ただし、感情を基盤とする親密さは一方的なものではなく、フランス当局が日本のプロパガンダがベトナム人に与える影響を懸念し、検閲を行ったため、ベトナムにおける日本の親密性形成には限界があった。日本のプロパガンダ活動は、フランスの植民地政権との協調という矛盾した状況の中で展開されており、ベトナム人の中での共栄圏への共感に限定的であった。フランス当局による検閲や監視が行

われる中で、日本の意図する親密性が完全に形成されたかどうかは疑問が残る。とはいえ、一部のベトナム人知識層においては、日本の姿勢が好意的に受け取られたという報告もある。これにより、日本のプロパガンダが完全に失敗したわけではなく、少なからず影響を与えたことが示唆される。

第3にギデنزの理論において、親密圏は信頼と感情に基づくものである必要がある。しかし、日本が文化的共通点や価値観を強調しつつベトナム・東南アジアとの間で形成しようとした親密圏は、外部からの押し付けであり、その背後には日本が「保護者」や「指導者」としての立場を維持しようとする権力の行使が隠れていた。当時のベトナムの知識層や一般市民が『新アジア』が描いた大東亜共栄圏をどのように受け入れ、抵抗したのかについての考察は、今後の課題にしたい。

参考文献

- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*. Cambridge: Polity（松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』而立書房、1993年）。
- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Stanford University Press, 1992).（松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房、1995年）
- Karova, Petra, 2012, *The Emergence of South Seas Studies in Relation to the Development of Ethnology: The Study Case of Nobuhiro Matsumoto's Early Work*, 早稲田大学『アジア太平洋研究科論集』, Vol.24, pp.287-301.
- Nguyễn Kỳ Nam, 1964, *Hồi ký Nguyễn Kỳ Nam, tập II (1945-1954)*. [グエン・キ・ナム、1964、『Nguyễn Kỳ Nam 回想録』第2巻 (1945-1954)]
- 石川準吉、1982、『国家総動員史・資料編 第四』、国家総動員史刊行会。
- 井上祐子、2009、『戦時グラフ雑誌の宣伝戦:十五年戦争下の「日本」イメージ』青弓社。
- 加納寛、2009、「戦時下日本による対タイ文化宣伝の一断面：『日泰文化』刊行をめぐって」『中国21』31：307-332。
- 川崎賢子、2000、「戦時下対外宣伝における日本語と日本紹介：雑誌『FRONT』とその周辺から」『昭和文学研究』41：84-99。
- 外務省編、1965、『日本外交年表並主要文書』上巻、原書房。

- 小暮修三、2008、『アメリカ雑誌に映る〈日本人〉オリエンタリズムへのメディア論的接近』青弓社。
- 柴岡信一郎、2007、『報道写真と対外宣伝:5年戦争期の写真界』、日本経済評論社。
- 柴崎厚士、1999、『近代日本と国際文化交流:国際文化振興会の創設と展開』、有信堂。
- 白石昌也・古田元夫、1976、「太平洋戦争期の日本の対インドシナ政策——その二つの特性をめぐって——」『アジア研究』第23巻3号：1-37。
- ドウス、ピーター（Duus, Peter）、藤原帰一訳、1992、「植民地なき帝国主義」『思想』814号：105-121。
- 難波功士、1998、『「撃ちてし止まむ」：太平洋戦争と広告の技術者たち』、講談社。
- 難波ちづる、2006、「第二次大戦下の仏領インドシナへの社会史的アプローチ～日仏の文化的攻防をめぐって～」『三田学会雑誌』99巻3号：189-204。
- 波多野澄雄、1996、『太平洋戦争とアジア外交』、東京大学出版会。
- 山本有造、2011、『「大東亜共栄圏」経済史研究』、名古屋大学出版会。

Abstract

**Construct the Image of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere as an Intimate Zone -
Analyzing the Propaganda Magazine 'Tan A' (New Asia) -**

Vo Minh Vu

Using the Vietnamese propaganda magazine “Tan A” (New Asia) which Japan published, the paper discusses the portrayal of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere. It focuses on how Japan indoctrinated the Vietnamese people that the Greater East Asian Co-Prosperity Sphere could become an “intimate sphere” and how Japan attempted to build a sense of “intimacy” or “closeness” with Vietnam, as part of the broader strategy to promote the Co-Prosperity Sphere. The study highlights how Japan sought to present itself as a cultural and political leader, emphasizing shared Asian values, history, and the goal of liberation from Western colonial powers. Through *Tân Á*, Japan aimed to blur the boundaries between “insiders” (Vietnamese) and “outsiders” (Japanese) as well as propagated a narrative that promoted cultural, economic, and political solidarity between Japan and Vietnam by creating emotional ties and mutual trust. This emotional bond was part of a broader effort to present the Co-Prosperity Sphere as a “family,” with Japan as the “older brother” guiding the younger Asian nations toward collective prosperity and independence.